

☆ 誰も心の中にある、目には見えない一瞬を巡る！ 気鋭タッグによるショートSTORY...

トウキョーニキターナカクサマ

文 石井光太

絵 今日マチ子

神戸から大阪の梅田あたりまでは、電車でわずか二十分の距離だ。だが、人によつては、その距離は日本と外国よりも遠く感じるかもしれない。

数年前から仲良くしている新聞記者のA君は、三十代半ばで神戸の出身だ。大学卒業まで関西にいて、就職してから東京に出てきた。ある日、話をしていたら、彼がこんなことを言った。

「僕のお祖父さん、ずっと神戸に住んでいるのに、六十年ぐらい大阪へ行ったことがないんですよ。大阪を通るのも嫌らしく、東京へ行く時はわざわざ飛行機を使っていたぐらいなんです」

家族はA君のお祖父さんが大阪へ行きながら知らないことを知っていたが、その理由は聞いたことがなかった。過去に嫌なことがあっただけで、いざとなったら行くだろうくらいにしか思っていなかった。

ところが、大阪に暮らす親戚が亡くなった時、お祖父さんは葬儀に行くことを拒んだ。冠婚葬祭にはうるさい

人なのに、なぜそこまで大阪を毛嫌いするのか。

後日、A君はお祖父さんと二人きりになった時、何気なく理由を尋ねてみた。するとお祖父さんはこう答えた。

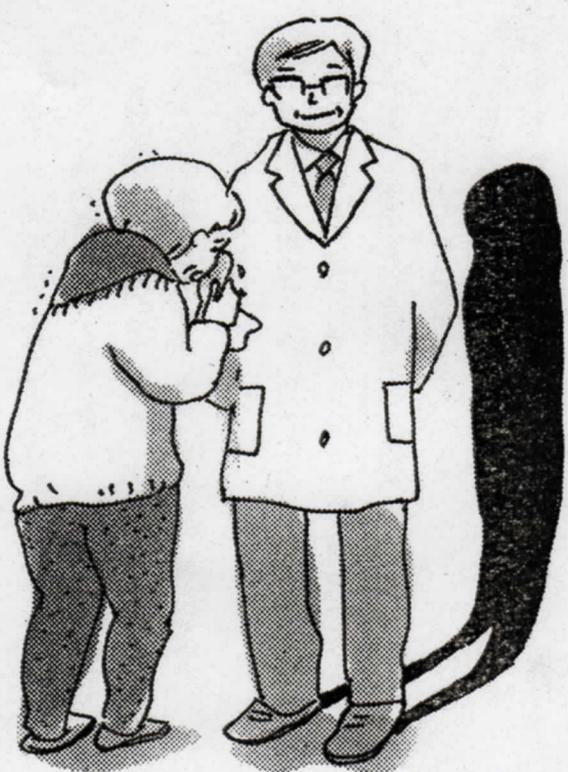
「私は戦争で南方へ行った時、ある戦友を亡くした。彼は戦争の末期に精神を病み、自殺をしたんだ。だけど彼の名誉のために、自殺ではなく戦死ということになった。そして、そのことを遺族に、私が伝えに行つたんだ。大阪の天王寺近くの実家まで行き、遺族に『立派な戦死でした』と言った。

でも、嘘をついたという罪悪感はずっと私の胸に残った。いつか遺族が真実を知って私の嘘を見破り、家に押しかけてくるのではないかと。それ以来、私は遺族に会うのが怖くて、大阪に行けなくなつたんだ」

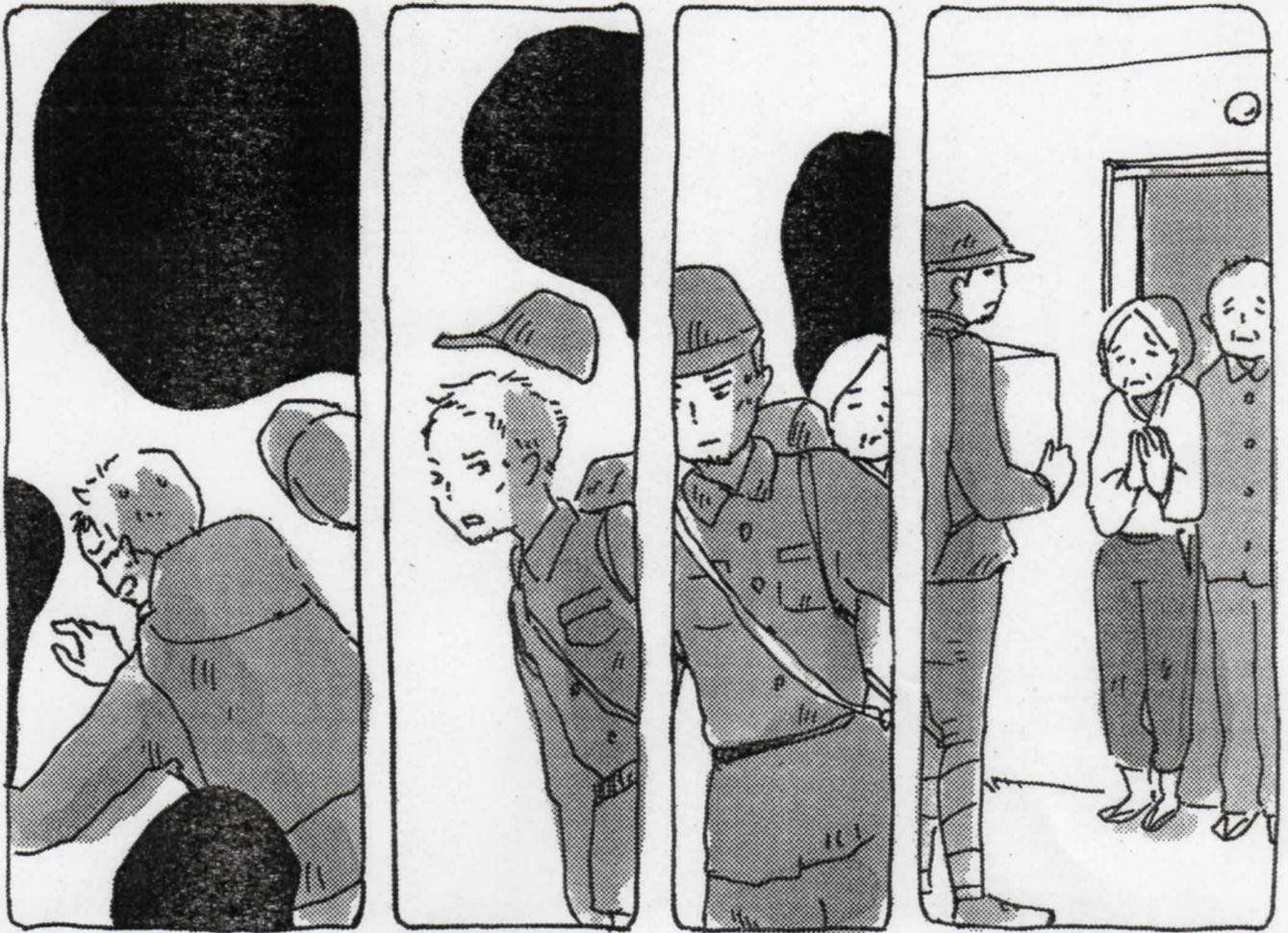
お祖父さんは良かれと思って嘘をついたのに、時が経つにつれて罪悪感が膨れ上がってしまったのだ。

私はA君からこの話を聞いた時、人間の死の現場に寄り添い、「嘘」をつくことになつた二人の話を思い出した。

一人は葬儀関連の会社の経営者であり、専門学校教職も務める五十代の宿原さんという女性だ。



月イチ連載! の「第十話」嘘 つま



K o f u t a h i i y u M a c h i k u K y o c h i i s a n a k a m i s a m a

☆

勤務先の専門学校には葬儀関連のコースが設置されており、宿原さんは主に死に化粧の方法を教えている。死に化粧とは、死者にお化粧を施すことである。医学の発展により闘病期間が長くなるにつれて、限界まで痩せ細った状態で死ぬことが多くなった。そこで宿原さんは遺体に化粧を施すことで、できるだけ元通りの顔に戻すのだ。宿原さんはこう語っていた。

「故人にお化粧をする際は、まず手を合わせて『おじいちゃん、ちょっと協力してね』と声をかけてから、行うようにしています。死に化粧というのは、単に化粧をすればいいというわけではありません。

最近の人は延命治療を受け、薬漬けにされて亡くなるので、とても苦しそうな表情をして口を開けたり、眉間に皺が寄っていたりします。お化粧の前は筋肉を揉みほぐし、口を閉め、表情をできるだけ和らげなければなりません。そうやって表情を変えてから、保湿クリームをたっぷり塗った上で、ご遺族に生前の表情をお聞きしたりしながらお化粧をしていくのです」

ただ、葬儀社の経営者として対面する遺体は、病死者ばかりとは限らない。中には自殺者を扱わなければならないこともある。首を吊った遺体には、首にロープの痕が赤黒く残り、舌が顎ぐらゐまで伸びてしまっていることがある。宿原さんはそんな遺体の舌を折り畳むように口に戻し、化粧によってロープの痕を消す。

「ただ、自殺した方の場合、参列される方々もそのことを噂として知ることがあります。そんな時、ご遺族には尋ねにくいので、葬儀会社の人間である私に『死因はな

んですか』と尋ねてくるのです。そんな時、私は『心筋梗塞です』と答えるようにしています。『遺族の立場を守るために、そう答えるのです。嘘だと言われれば嘘かもしれないませんが、故人のプライバシーを守るのも一つの仕事なのです』

自殺だと答えれば、参列者の間に噂が広まり、遺族はさらに辛い思いをする。それを防ぐのも自分の仕事だと考え、化粧と言葉で故人のプライバシーを守っているのだ。

もう一人、思い出すのは、東日本大震災の直後に、死体検案の仕事をした医師だ。今も地元で開業医として働いているので、匿名でK医師としたい。

K医師は震災発生直後、被災地に設置された遺体安



置所へ駆けつけ、そこで死体検案の仕事をした。津波で亡くなった人が毎日何十人も運ばれてくる中、一体一体遺体を調べて死因を書き記し、DNA試料を採取したのである。

最初に私がK医師と話をした時、こんなことをつぶやくように言っていた。

『みんな窒息だから、本当に苦しそうな顔をしていたよ。口を開けて叫ぶような表情だった。毎日、何十体もそれを見ていると、ほとほと気が滅入ってきた』

遺体はヘドロにまみれ、ねじまがり、苦しそうな顔を歪めたり、何かにしがみつこうとしたりしていた。同じ町の人たちがそんな姿となって運ばれてきて、遺族が泣き叫ぶのを目の当たりにするのは、さぞかし辛かっただろう。

それから約一年が経った。ある夜、私はその被災地を訪れ、K医師と仲のいいS歯科医と酒を飲んでみた。

その時、S歯科医が言った。

『K医師いるでしょ。先日、あの人が震災の特番に出たんだよ。その時、K医師はテレビカメラの前で、こう言ったんだ。『津波で死んだ方々は即死だった。だから、まったく苦しんでいなかった』って。』

俺も遺体安置所で歯形の確認をしていたし、K医師もずっと遺体の検案をしていた。だから、遺体が苦しそうな顔をしていたのはわかっていた。それでも、K医師はテレビを覗いている遺族に配慮して、『津波で死んだ人は苦しんでいなかった』って言ったんだよ。俺は本当にK医師が偉いと思ったよ』

テレビの前で嘘をつけば、記録として残ってしまっし、

同じ医師から『何を言っているんだ』と非難される可能性もある。だが、K医師はそのリスクを承知した上で、遺族の気持ちを考えて嘘をついたのだ。

話を最初に戻そう。私は新聞記者のA君にお祖父さんの話を聞いた時、人は死に際して多くの荷物を遺していくものであることを思った。遺族だけでそれを支えきれない時、周囲の人々がそれを分かち合って支えなければならぬ。そうして初めて遺族は生きていけるのだ。

私はA君に言った。

『お祖父さんは六十年以上も、戦友の死の重さを背負ってきたんだ。そろそろA君と一緒に背負ってあげてもいいんじゃないかな。話を聞いたりするだけでもいいと思う。お祖父さんにすれば、話をするだけで楽になることはあると思うよ』

A君はうなずいた。

『そうだね。死の現場に携わる人たちが、そうやって分かち合っているのだとしたら、僕も記者としてそれを聞くことで、彼らの抱えているものを背負うべきかもしれない。少なくとも僕の』

お祖父さんなんだから』

A君はそう言った後、今年のお盆には神戸の実家に帰ろうかな、とつぶやいた。

